

一にも二にも肝っ玉 —商人になった清水次郎長—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

東海道一の大親分と勇名を馳せた清水次郎長(1820-1893)は明治維新と共に新たな転機を迎えた。もともと米屋の主人だった次郎長は商人へ回帰し、さまざまな事業で辣腕を発揮する。

地元の清水港の発展へお茶の販路拡大と近代的な港湾整備を訴え、貿易商、お茶業者、廻船問屋などと会社を立ち上げて横浜との定期航路を開設する。富士山南麓の開墾、英語塾の開校、病院の設立などにも尽力し、功績を記念して侠客としてただひとり銅像が建立された。晩年は船宿を経営し、著名人らが訪れて繁盛する。

賭博罪で服役したこともある次郎長が正業に励んだのは勝海舟の使者として江戸無血開城の先導役を果たした山岡鉄舟との出会いがあったからだ。17歳も年下の山岡を「自分の親分は山岡鉄舟」と公言した次郎長は幕末から明治への動乱期の渦中でアウトローからヒーローへと変身していく。

太く短く生きようと

次郎長は駿河国、現在の静岡県静岡市清水区で船持ち船頭の次男として生まれた。長五郎と名づけられ、跡取りのいない母方の叔父・山本次郎八の養子となる。清水港で大きな米屋を営んでいた次郎八家の長五郎として幼い頃から次郎長のあだ名で呼ばれるようになる。

養父の次郎八が亡くなると妻帯して家業を継ぐ。当初は仕事に精を出したものの、旅の僧が人相を見て25歳まで生きられないと言われたことから、

太く短く生きようと生活が一変した。日ごとに博奕にのめり込み、喧嘩の果てに相手を斬って弟分らと出奔する。妻とは離別、家財は姉夫婦に譲って渡世人となり、諸国を旅して剣術の腕を磨いた。

占いがはずれて25歳を過ぎると故郷に戻り、大物博徒間の抗争を仲裁して名を上げる。子分も10人ほど抱え、盟友の妹おちょうを娶って一家を構えた。だが家計は火の車で満足に物も買えない。蒸し暑い夏かやの夜、おちょうが嫁入り道具として持参した蚊帳を夫婦の寝室に吊ろうとしたところ、次郎長は待ったをかけた。「家の中では皆平等だ。おれたちも子分たちと一緒に蚊に食われようじゃないか」と。

こんな次郎長を慕って各地から続々と無宿者が集まってきた。大政、小政、森の石松など個性的な子分たちが顔を揃え、のちに山岡鉄舟の紹介で次郎長の養子になる元磐城藩士の天田五郎が上梓した『東海遊俠伝』や講談、浪曲、映画、小説などで清水28人衆として人気を博す。清水一家は東海から関東一円に轟く屈指の新興勢力となり、



清水次郎長

甲州を縄張りとする黒駒勝蔵くろこまのかつそうとの因縁の対決などを通じて怖いもの知らずの次郎長伝説が語り継がれていった。

仏に敵も味方もない

侠客としての次郎長の名声が高まる一方で時代は風雲急を告げようとしていた。1868年、鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗れ、薩長をはじめとする官軍は討幕の錦の御旗を掲げて駿府まで進撃した。恭順の意向を示した第15代将軍・徳川慶喜から全権を委任された陸軍総裁の勝海舟は江戸総攻撃を回避するために腹心の山岡鉄舟を東征大総督府参謀の西郷隆盛のもとに派遣する。

厳戒態勢の中、夜半に由比の薩垂峠さつたとうげまでたどり着いた山岡は官軍に追われて松永家が営む望嶽亭ぼうがくていへ逃げ込んだ。事情を察した亭主は親交のあった次郎長の家に山岡を送り届け、次郎長と子分たちが山岡を守りながら西郷との会見場所へ案内する。対面した西郷は山岡の凄まじい気迫に打たれ、勝との会談を承諾。この結果、江戸の住民150万人を戦火から救った江戸無血開城が実現する。のちに西郷は「金もいらぬ、名もいらぬ、命もいらぬ人は始末に困るが、そのような人でなければ天下の大事は成し遂げられない。ほんとうの無我無私の忠胆なる人とは山岡さんの如き人でしょう」と勝に語った。

官軍の勝利に伴い次郎長は東征大総督府の駿府差配役から東海道と清水港の警固役に任命される。清水港では旧幕府海軍副総裁の榎本武揚が率いて品川沖から脱出した咸臨丸と官軍が交戦する事件が起こった。咸臨丸は暴風雨で破損し、修理のために清水港に停泊したところ、官軍に見つかって撃沈される。

駿河湾には両軍の犠牲者の遺体が放置され、波に漂い腐臭を放っていた。見かねた次郎長は子分たちに「敵味方の区別なく引き上げて丁重に葬れ」と指示し、すべての遺体を回収して手厚く供養する。新政府の役人が次郎長の勝手な行動とがを咎めると「死ねば仏だ。仏に官軍も賊軍もあるものか。仏を弔うのが悪いというのなら、次郎長はどんな罪でも喜んでお受けいたします」と切り返した。次郎長の行動に深く感動した山岡鉄舟は犠牲者の墓に「壮士の墓」という墓碑銘を揮毫した。

喧嘩に負けない秘訣とは

1869年、次郎長は江戸火消しの頭を務めていた新門辰五郎と会い、静岡で謹慎生活を送ることになった徳川慶喜の護衛役を依頼される。娘が慶喜の側室をしていた関係で辰五郎は維新後も身辺の警護にあっていた。役目を引き継いだ次郎長は投網漁が好きだという慶喜を連れ出して清水港と一緒に遊び歩いたという。

1874年、静岡県大参事などを歴任して明治天皇の侍従となった山岡鉄舟のすすめで富士山南麓の開墾に着手する。静岡監獄の模範囚たちを正業に就かせるという目的で積極的に使役した。現場では腰縄を外したり、家族と自由に面会させたり、大胆な試みで評判を呼ぶ。

翌年から静岡名産のお茶の販路拡大に情熱を燃やし、大型の蒸気船が入港できるように清水港の拡張工事に奔走する。海外への輸出も視野に入れ「これからの若い者は英語を話せなきゃだめだ」と旧幕臣の私塾の一角で英語塾を開かせた。

みずからも頻繁に横浜を訪れ、貿易商と地元の廻船問屋の仲介役を果たす。1881年、お茶業者を交えた共同出資で新たに静隆社を設立し、横浜港と清水港の悲願の定期航路を開設した。次郎長の狙いどおり自慢のお茶はアメリカにも輸出され、清水港は日本一のお茶の輸出港となった。

ところが賭博犯処分規則で過去の罪状を問われ、1884年に懲役7年・罰金400円を科せられて監獄に収監された。しかし山岡鉄舟や初代静岡県知事の関口隆吉の支援で翌年には特赦放免となる。

晩年は清水港に船宿・末廣を開業し、新政府の要人となった榎本武揚らも訪れて賑わった。1888年、山岡鉄舟が胃がんで死去し、葬儀に清水一家で参列する。5年後、次郎長も風邪をこじらせ、74歳で波乱の生涯を閉じた。「侠客次郎長之墓」の墓碑銘は榎本武揚の書による。

末廣には日露戦争で戦死して軍神と讃えられた海軍将校の広瀬武夫がよく顔を見せた。若き日の次郎長の武勇伝を聴くのを楽しみにしていた。

あるとき広瀬が「親分、喧嘩に負けない秘訣は？」と尋ねると次郎長は「一にも二にも肝っ玉ひとつさ」と即答した。